民報 | 平成29年5月15日(月) | 8面 | 一般 医大

子ども・女性の健康相談室 14

発達に合わせ適切に

絵本の読み聞かせ

福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター教授
横山 浩之氏

絵本の読み聞かせは、おおよそ一歳以上の子どもにとても大切です。なお、言葉の発達が遅れている場合は、下記の文章を言葉の発達年齢に置き換えて、お読みください。

一歳では、絵本の読み聞かせは、人とのやりとりを覚えるという意味で大切です。一歳代ではいろいろな言葉を覚えます。子どもの発達にとって、人とのやりとり、特に保護者とのやりとりは、何より大切です。保護者との楽しい経験が、人を信じる心を養います。よって、この時期の絵本の読み聞かせは、絵本という媒体を通して、親子のやりとりが楽しめることが大切です。物、生物、自然など、実際に存在するものについて、やりとりしましょう。架空のことは、言葉の発達を遅らせることがあるようです。

二歳になると、自分の体験と絵本の内容を結び付けて、喜べるようになります。例えば、いろいろな動物が「のせて」と言って、車に乗せてもらってデパートに行く「のせてのせて」(松谷みよ子作)を大喜びするのも、この頃です。この時期までに「絵本の読み聞かせ」を毎日の習慣にしてしまいたいところです。

三歳を過ぎると、ストーリーがある物語を楽しめるようになります。お薦めは、イソップ物語や日本むかし話のように教訓を含む物語です。一～二歳に、絵本の読み聞かせの楽しさを体験できていれば、教訓を含む物語を子どもはそのまま覚えてくれるでしょう。この読み聞かせが役立つのはずっと後です。例えば、小学校中学年ぐらいになると、子どもはよく「なぜ勉強しないといけないの」と保護者に問い掛けます。「ありとキリギリス」を知っていれば、「あなたは、ありになりたいの、キリギリスになりたいの?」と言えば、子どもは淡々わかってくれます。

四～五歳の子どもでは、絵本の読み聞かせは、字を読む練習です。字を読む準備ができると、保護者のまねをして絵本を読みます。最初は、字を読むのではなく、読み聞かせられた内容を覚えて読むふりです。間違っていても、たっぷり褒めておくとよいでしょう。その上で、同じ本を読み聞かせていると、自分の読みと保護者の読みが異なることに子どもが気が付いてきます。ここに気が付いた子どもは、字の読み方を聞いてくるようになります。このタイミングで教えると、あっという間に正しい読み方を覚えます。子どもが覚えたいと思っているからです。そして、あっという間に覚えられるので、子どもも自信が付きます。

=次回は6月19日掲載=